

「ここが畑になるの？」 若葉台保育園（福島県いわき市）

[3 ~ 5 歳児]

<事例1> 「ここが畑になるの？」（3月16日） 3・4・5歳児 保育士の思い

自分たちの畑ができると、大喜びだった子どもたち。早速、その場所へ園バスに乗り出かける。しかし、子どもたちが見たその土地は、雑草が生え、大小の石がゴロゴロと転がる荒れた土地であった。子どもたちも「これが畑？」と不思議そうな顔をし、「ここでおいモ作れるの？」と不安そうな様子を見せる。

ここから、子どもたちと保育士の畑作りがスタートした。

「せんせーい、ここが畑になるの？」とまだまだ畑と呼ぶには程遠い土地を見て、不安の色を隠せない子どもたち。じっと、目の前に広がった土地を見つめていた。

畑作りへの不安

「そうだよ。でもこのままで野菜とか果物できるかな？」という保育士の質問に、「できないよ。だって石いっぱい落ちてるしさ」「ポコポコだしね」と子どもたち。どうすれば野菜や植物の育つ畑が出来るか、子どもたちに考えて欲しいと思い、「じゃあどうしたらいいかな？」と子どもたちに聞いてみる。

「石は取らなくちゃダメ！」「水とか肥料とかもあげなきゃダメなんだよ」と自分の意見を次々に言う子どもたち。「みんな、よく知ってるね。元気な畑を作るために、今日はみんなで石拾いしようね」「わかった！」「頑張る！」と張り切る子どもたちであった。

重さが10kgほどもある袋を3人で協力して運び始めたKM、KY、YM。「重いから先生が持っていくよ」と保育士が運ぼうとすると、「大丈夫。自分たちでやってみる」と意欲的である。YMは「石をいっぱい拾って、お山を作るぞ！」と楽しみながら、作業を行っていた。

仲間との共有体験

畑を見渡し、「先生、ここの石全部拾うの？もう疲れちゃった」とTM。「がんばって石拾いすれば元気な畑ができるよ。そしたら、おいしい物もたくさんできるからね」と保育者が言うと、「分かった！じゃあ、先生も一緒にやってね」とまた夢中で石を拾い始めた。

石拾いが終了し、子どもたちの拾った石の山ができる。「すごいね、こんなに石拾ったんだね」と保育者に誉められ、「疲れたけど、頑張ったよ」とMY。

造り出す喜びの体験

「畑作るのって大変だけど、楽しかったよね」と子どもたち。

「そうだね。野菜や果物を作っている人は、毎日大変なお仕事をしているんだよ。みんなもがんばって保育園の畑をつくらうね！」と農業の大変さを子どもたちに伝えながらも、次回の活動への期待を膨らませていけるよう話をする。

~考察~

自分たちが想像していた畑とのギャップに戸惑う様子も見せたが、大変な作業も「自分たちでやってみる」という4歳児の言葉にあるように、自分たちの畑作りに意欲的に参加することができた。石拾いという作業を通し、畑作りの大変さに気付き、また自分たちの畑に対する思い入れも強くなったようである。

<事例2> 「ぎゅうふんって何？くっせー！」（3月31日）

3・5歳児 保育士の思い

石拾いから始まった畑作り。荒地を畑にするための牛糞撒きを、子どもたちにもやってもらうことにした。畑に着いたら黒い山があり、「これ何？」と不思議がる子どもたち。臭い牛糞を嫌がるかと予想していたが、「くっせー！」なんて言いながらも、大事な畑の栄養になると知って、はりきって取り組む姿が見られた。そして、その牛糞の中に、ミミズやカブトムシの幼虫を見つけ、大喜びの子どもたち。幼虫は保育園に持ち帰って育てることにした。畑作りと平行して、この日からカブトムシの飼育もスタートした。

「どこが畑なの？」「ぼこぼこしてるよ」とまだ未完成の畑を興味深げにみていた3歳児。すると、「先生、あれなーに？」とKT。畑の隅に運んであった牛糞の山を見つけた。

何でウンチがあるの？
興味・関心と驚き

「よく見つけたね。あれ何だと思う？」と保育士が質問すると、「うーん、何かなあ見たことない」と考え込む子どもたち。みんなそれが何かよく分からない様子であったが、MKが「ウンチ？」と答えると、「ええーっ！何のウンチなの？」「どうしてここにウンチがあるの？」とびっくりした様子を見せる。「先生、ほんとにウンチ？」と子どもたちは保育士の答えに真剣に耳を澄ましていた。「これはね、牛さんのウンチだよ」保育士が答えると、ますます驚いた表情を見せ、「牛のウンチだって」「牛さんが歩いてきて、ウンチして行ったんだよ」牛糞の山を子どもたちに良く見せると、「くっせー」「うえ〜っ！」という声があちこちから聞こえ、鼻をつまむ子も。「これから畑にウンチを混ぜるよ。みんな手伝ってね」と保育士が声をかけると、「何で？」「くさくなっちゃうよ」と子どもたち。



「何で畑にウンチを撒くか知ってる？」という保育士の質問に、「知ってる！あのね、ウンチって栄養になるんだよ」とKK。「野菜が元気になるんだね」とYH。全員での牛糞まきが始まった。「くさいね〜」「いっぱいあるね」と話しながら、それでも張り切ってスコップに山盛りの牛糞を運ぶ5歳児であった。

大変な労働もあることを知ってほしい。

自分たちの畑の栄養のため頑張る。意欲の高まり。

途中で土の中にミミズを見つけ、「うわっ！ミミズ！」と男の子数人がスコップでミミズを突き始めると、「かわいそうだからやめろよ！」とSR。「いっぱいミミズいるねー」とTM。「本当だね、こっちにもいる。何でミミズいっぱいいるのかな〜？」KT。「ウンチの栄養があるからだよ！」とMK。ただの牛のウンチも、今回の活動を通しては畑作りにはとても大切なものだと気付くことができた子どもたちだった。

<事例3> 「もっともっと大きくなってね」 (5月23日) 3・4歳児

自分たちの畑作りが始まって3ヶ月目。畑へ向かう子どもたちの意識が少しずつ変わり始め、以前に増して意欲的に農園活動に参加するようになった。今回は、畑に植えた植物や野菜に肥料をあげるために畑へ向かった。何もなかった土地に、芽が出て、小さな生命が少しずつ育っているのを子どもたちも、自分の目で確認することができた。

「あー！もう(葉が)生えてる！」とIY。「本当だ〜！」と目を見開いて、ジャガイモの成長を自分たちの目で確認した3歳児たち。「良かったね。元気に育ってるね」と子どもたちと一緒にその成長を喜ぶ。「じゃあ、まずは草むしり頑張ろう！」と保育者の掛け声で草むしりが始まる。「はーい、先生いっぱいやったよ！」とYM。「わっ、長いー！！クラゲの根っこだ！」と自分で抜いた長い根っこを自慢げにみんなに見せるSH。「すごいね。みんな頑張ったね。畑がきれいになったよ。疲れた？」子どもたちに聞いてみると、「まだまだ大丈夫！」「先生次は何やるの？」とやる気十分。野菜や植物の成長を自分たちで確認した子どもたちは、今まで以上に意欲的に畑での作業に取り組むようになる。農作業の大変さを実感しながら、野菜が育つ喜びを感じた子どもたち。今までとは違った視点から、自然と触れ合う楽しさを味わって欲しいと思う。

驚き・感動の体験

その後、肥料を畑にまく。「ご飯ですよ。いっぱい食べてくださいね」と声をかけながら、優しく葉っぱの両脇に肥料を撒くKM。「もっと大きくなってね」と野菜の成長に期待を膨らませ顔を見合わせ嬉しそうにする4歳児。野菜にも命があることを、いつの間にか理解している様子。

仲間と喜びの共有

これからも自然との触れ合いの中で、思いやりの気持ちが育ってほしいと思う。

~考察~

いつの間にか大きくなっていった葉っぱに驚いた3歳児。自分たちの畑に植えた植物や野菜が少しずつ成長していることを、自分たちの目で確認し、ほっとした表情や嬉しそうな表情を見せた4歳児。自分たちが土作りから行った畑に対する思い入れは保育者が予想した以上に大きく、植物や野菜の成長は子どもたちの活動意欲をより高めてくれた。



<事例4> 「やったー！ジャガイモできた！」 (8月1日) 3・4・5歳児

みんなで作った畑で、初めての収穫作業！ジャガイモ掘りを行うことになった。自分たちで今まで育ててきた野菜の収穫に、子どもたちがワクワクドキドキしているのが伝わってくる。「大きいおいもできてるかな？」「おいしいおいもかな？」不安と期待の入り混じる中、ジャガイモ掘りが始まった。

自分たちで土作りから行った畑での収穫は、今まで経験したことがないくらいのワクワク感と、少しの不安も入り混じる貴重な体験となった。「ジャガイモできてるかな？」とドキドキしながら土の中に手を伸ばし、ジャガイモに触れた時の子どもたちの表情は、喜びと達成感と満足感でいっぱいであった。自分たちで育てたジャガイモを大事そうに手のひらに乗せ、じっと見入る姿はこれまでの生活の中では見ることのなかった子どもたちの姿であった。決してきれいな形のジャガイモではなかったが、子どもたちはそのひとつひとつを大切な宝物のように感じたのではないだろうか。

みどころ

「ここが畑になるの？」と不安を感じるほどの土地を目前にした子どもたちですが、保育者の問いかけにより、「自分たちで畑にすればいい」ということに気付きます。栽培活動の楽しさや充実感を知っている子どもたちは、作業の大変さに「畑仕事をする方たちの大変な仕事」を感じながらも、進んで活動することで、「石や草が畑に不要なこと」「土に牛糞を混ぜ栄養のある畑の土にすること」が分かりました。こうした経験から栽培物の生長への関心や期待感が高まり、「雑草とりや肥料やりの必要性に気付き」意欲的にかかわる姿になりました。こうして気付いたことが体験を通して「分かったこと」になり、収穫の喜びと共に、「自分たちの作った土は、おいしい野菜のできる畑になった」と実感することができました。